

氏 名	森村 修 (教授、准教授、専任講師)
こんな研究をしています	<p>① 現代哲学 (現象学を中心とした現代ドイツ哲学・現代フランス哲学)・比較思想</p> <p>② 「臨床哲学(社会政治的トラウマ研究)」・現代倫理学 (ケアの倫理学・生の倫理学)</p> <p>③ 日本近代哲学 (明治期以後の日本哲学・日本思想)</p> <p>④ 現代アートの哲学 (アート理論)・美学</p> <p>⑤ パフォーマンスの思想研究 (日本の現代演劇・映像論など)</p>
こんな成果を挙げています	<p>① 【単著】森村修『ケアの形而上学』、大修館書店、2020 年</p> <p>② 【共著】森村修「『社会政治的トラウマ』の倫理」、牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・斎藤元紀編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019 年</p> <p>③ 【共著】森村修「アマルティア・セン——自由と正義のアイデア」、榎木玲子/法政大学国際文化学部編『〈境界〉を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016 年</p> <p>④ 【共著】森村修「ヨーロッパ」という問題—テロルと放射能時代における哲学」、熊田泰章編『国際文化研究への道：共生と連帯を求めて』所収、彩流社、2013 年</p> <p>⑤ 【論文】西田幾多郎の「グラマトロジー」——書の美学=感性学 (エスティクス) の可能性、東北大学哲学研究会『思索』第 53 号、2020 年</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>2020 年 6 月に出版した『ケアの形而上学』では、「ケアの倫理」をさらに「存在することの〈ケア〉」という角度から捉える理論的実践を行っている。さらに障がい者・病者・高齢者などが生きやすい社会を構築するために、広い意味での〈アート (=芸術 art)〉の実践を通じて思想や哲学という理論的実践に何ができるかを考えている。ちなみに国際文化学部のゼミでは、「Socially Engaged Art (ソーシャリー・エンゲイジド・アート)」の実践を〈ケアの倫理〉の領域に取り込めないかを模索している。また東洋思想研究として、「(Socially) Engaged Buddhism (社会参加仏教)」の立場から、反戦・貧困・差別撤廃をめぐる仏教徒の社会参加について思想的に考察している。「ケアの倫理」・「存在することの〈ケア〉」については、猟奇殺人者やテロリスト、性犯罪者などの凶悪犯罪者の「心の闇」と彼らの脳との関係を精神医学・神経倫理学・精神分析学からアプローチしている。そこから、「犯罪被害者・被害者家族」の社会的支援のみならず、「犯罪加害者・加害者家族」の社会的支援を「ケアの倫理学」の課題として考えている。</p>
こんな授業を行なっています	<p>・哲学テキストの講読を行うことが基本。外国語文献(英・独・仏)を用いるようにしている。外国語はあくまでツールであり、語学ができるからといって、思想が理解できるものではない。「考える」ことに主眼を置いた授業を行なっている。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>・2016 年度から「比較思想学会」の理事として、「Intercultural Philosophy」のあり方を考えている。また、論文査読委員も務めていた。前著『ケアの倫理』(2000 年)を機に、知的障害者施設「財団法人たんぼの家」(奈良市)と関わったり、「アート」と「ケア」の実践を繋ぐ「アートミーツケア学会」の会員として、学会の論文査読委員も務めたりした。「アート」との関連では、2020 年 3 月に開館した「京都市京セラ美術館」に関わった「森美術館」の元統括ディレクター(現・京都市美術館リニューアル準備室ゼネラルマネージャー)や建築家兼キュレーター(国際文化学部非常勤講師)が親しい友人であり、アートや建築と思想のコラボレーションを考えている。</p>
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	<p>私がインターカルチュラルな人物としてあげるのは、経済学者にして倫理学者のアマルティア・セン (1933-) である。『〈境界〉を生きる思想家たち』にも書いたように、彼はインドのベンガル地域出身で、長くイギリスのケンブリッジ大学で教鞭を取りながらも、国籍はインドのままである。しかも、彼の名付け親であり、アジアで最初のノーベル文学賞受賞者タゴールとともに日本の文化に敬意を払い、アジア人であることを誇りにする。センもまた、アジア人として初めてノーベル経済学賞を受賞し、それまで経済学の中でも冷遇されていた「厚生経済学 (welfare economics)」の重要性を一気に引き上げ、貧困や飢饉の問題にメスを入れる。さらにアメリカの政治哲学者ジョン・ロールズの『正義論』から政治哲学や倫理学から多くを学び、「正義」と「自由」を確保するために、「人間の安全保障」という観点を強調する。彼は、民族や宗教というアイデンティティを支えるものが反転して、他者を排除する暴力へと変ずることを告発しながら、国境という〈境界〉を超え、学問の垣根という〈境界〉を越えるアマルティア・センの理論と実践は、私たちに〈境界〉を侵犯 (transgress) する勇気と可能性を教えてくれる。</p>